

CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

Contents

1. 11月のおくて台風
2. 木枯らし1号について
3. お天気よもやま話 ~うろこ雲



1 11月のおくて台風

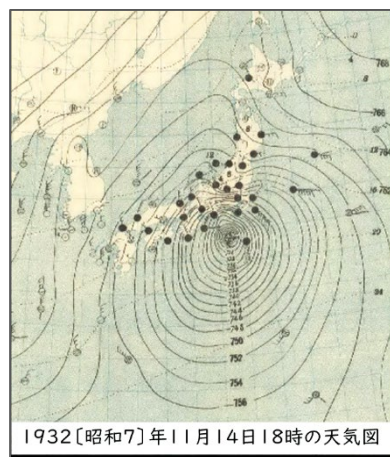
『季節外れ』という言葉をよく耳にします。台風シーズンは10月で終わりますが、過去にはまさに季節外れで11月に日本に大きな影響を与えた台風もありました。

気象庁は1951〔昭和26〕年以降、台風に関する統計をまとめていますが、11月に台風が上陸したのは、1990〔平成2〕年11月30日の台風第28号ただひとつです。〔これまでに上陸した台風は213個〕この台風は11月22日、日本からははるか南のカロリン諸島で発生し、その後西寄りに進んだあと、フィリピンの東の海上で進路を北寄りに変えて早い速度で北上しました。11月30日の14時過ぎに中心気圧970hPa、最大風速35m/sの強い勢力で和歌山県白浜町の南に上陸しました。上陸後は紀伊半島を北東に進み、30日の夜には温帯低気圧に変わりました。この台風による被害は死者・行方不明4名、浸水家屋約1500棟、農林水産関係の被害約50億円以上に及びました。

過去にさかのぼると、稀ではありますが11月に日本に大きな被害を与えた台風があります。明治以降で最も大きな被害をもたらした11月の台風が、1932〔昭和7〕年のものです。この台風は、フィリピンの東の海上で発生し、上記の1990年の台風第28号と良く似たコースをとり、11月14日の深夜から15日の早朝にかけて房総半島をかすめるように通過しました。

この頃の中心の気圧は950hPa程度で、当時の銚子測候所で観測した952.0hPaは銚子における最低気圧1位の記録で、現在まで更新されていません。気象庁で刊行していた当時の気象要覧には「台風は14日夕刻伊豆半島に迫り関東地方に猛威をふるい、…関東一帯は猛烈なる暴風と共に豪雨…崖崩れや樹木及び家屋の倒壊夥(おびただ)しく…被害激甚を極めた。」と記述されています。台風は15日朝には三陸沖に去りましたが、季節外れの猛烈な暴風と大雨により東海地方から関東地方、福島県の各地で死者・行方不明335名、家屋の全半壊約32000棟、浸水家屋65000棟の極めて大きな被害が出ました。

気象では台風に限らず、経験の少ない“季節外れ”の現象で思わぬ被害が出る場合があります。気象情報を利用するなど油断することなく、備えをしておきたいものです。





2 木枯らし1号について

木枯らし1号とは、気象庁HPによりますと、「季節が秋から冬へと変わる時期に、初めて吹く北よりの強い風」のことで、具体的には、東京地方では10月半ばから11月末の間（近畿地方では霜降り（10月23日頃）から冬至（12月22日頃））に、初めて吹く毎秒8メートル以上の北よりの風のことで、この時期に、北寄りの強い風が吹く気象条件と言えば、西高東低の冬型の気圧配置となったときになり、同時に気温も下がってくるので、冬を感じる初めての現象ということでしょう。報道などでも「木枯らし1号が吹きました。冬が到来しました！」という感じに報道されることが多いです。「桜が咲きました」「梅雨が明けました」というように季節の移り変わりがニュースになることは、四季を楽しむ日本らしい特徴でしょうか。

なお、発表地域に関しては、「春1番」は、北日本と沖縄地方を除く広い地域で発表されていますが、木枯らし1号については、東京地方（東京都から島しょ部を除いた地域）と近畿地方でしか発表していません。理由は、人口が多い地域であることや、冬型になるとからっ風になって火

災の多い季節になるから、という説もあるそうですがはっきりしません。

また、条件がありますので、12月の発表は近畿地方だけですし、時には木枯らし1号の発表がない場合もあります。表は、この10年の発表状況を示しています。10月の発表も多いですね。ところが、東京地方では、2018年以降の5年間で4回も発表がない年があります。「温暖化でこの時期には冬型の気圧配置になりにくくなった」と考えてしまいましたが、近畿地方を見ますと、いずれの年も発表されていますので、そんなことは言えません。不思議ですね。今年はどうなるのでしょうか。

2022年までの木枯らし1号の発表日

年	東京地方	近畿地方
2022	-	11月13日
2021	-	10月23日
2020	11月4日	10月23日
2019	-	11月4日
2018	-	11月22日
2017	10月30日	10月30日
2016	11月9日	10月29日
2015	10月24日	10月25日
2014	10月27日	10月27日
2013	11月11日	11月11日

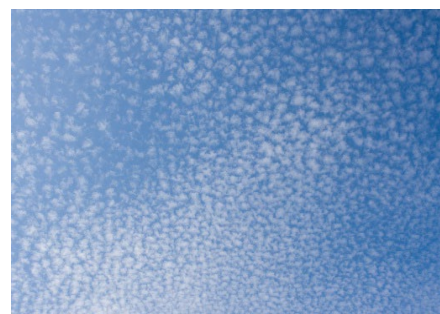
3 お天気よもやま話 ～うろこ雲

規則正しいつづつした雲である「うろこ雲」は、空にできる高さやその形、生まれ方などから大きく10種類に分けて名前を付けた「十種雲形」では「巻積雲」にあたります。うろこ雲は年中見られますが、秋の季語にもなっており、多くの方は秋を代表する雲と感じられているようです。巻積雲は、うねうねとした波模様やレンズ状になる時もあり、その時には「さば雲」や「いわし雲」という別名で呼ばれます。巻積雲は空の高いところ、上空5000～13000メートルくらいの高さにでき、ひとつひとつの雲に影はできません。うろこ雲によく似た雲に「ひつじ雲」がありますが、これは十種雲形では「高積雲」にあたります。高積雲は巻積雲に比べると低い位置にでき、ひとつひとつの雲に影ができます。

うろこ雲とひつじ雲の簡単な見分け方として、ひとつひとつの雲の大きさで判断する方法があります。水平線から30度以上の高さの空で、個々の雲の大きさが視覚度1度未満の時は巻積雲、それ以上の時は高積雲と判別できます。

水平線から30度以上の高さというのは、水平線からげんこつ3つ分くらいの高さで、視覚度1度未満とは、空を見上げて手を伸ばしたときの人差し指の幅くらい。つまり、個々の雲が人差し指に隠れる大きさだったら巻積雲（うろこ雲）、人差し指の幅より大きかったら高積雲（ひつじ雲）と見分けられるのです。

巻積雲は、台風や低気圧が近づいてくるときにあらわれることも多いです。昔から漁師の間では、巻積雲は「悪天の兆し」と恐れられていました。日本各地に「うろこ雲が出ると天気が一変する」という諺があり、雨の前触れとされているのも、このためです。規則正しく美しいうろこ雲に出会えると、いつまでの眺めていたくなりますが、上空の風の流れの影響を受け、すぐに姿を変えてしまいます。そのはかなさも魅力のひとつと言えるかもしれません。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

